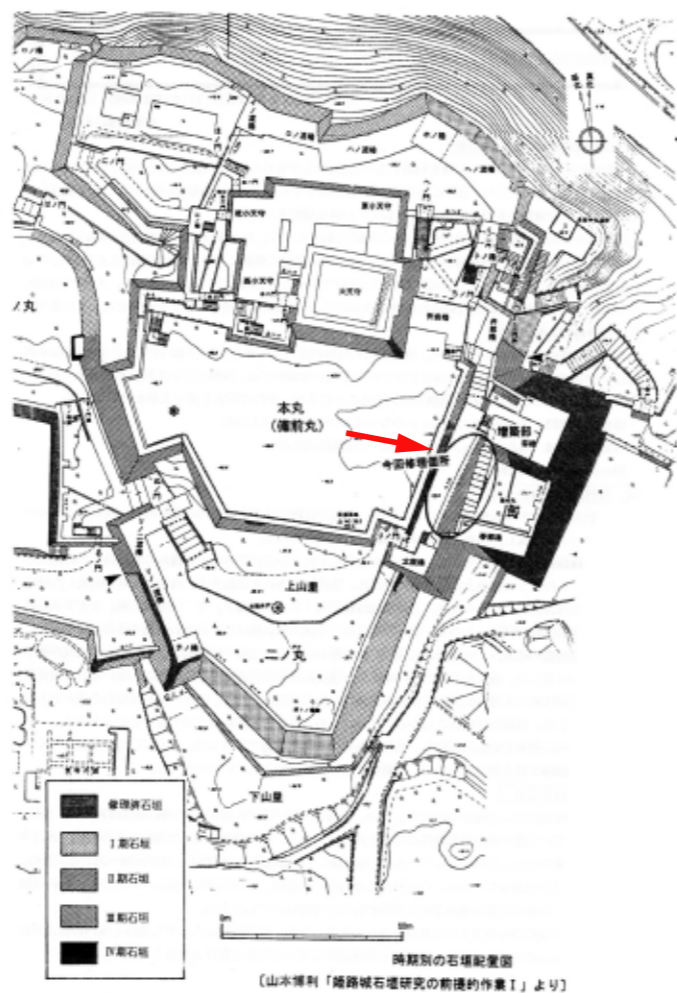


井戸曲輪（腹切丸）石垣の修理

1 姫路城井戸曲輪石垣の概要

姫路城は姫山と呼ばれる小丘陵を利用した平山城（ひらやまじろ）で、山麓から天守まで3～4段の石垣を築いています。このうち、東側にある帯の櫓（おびのやぐら）下の石垣は城内で最も高く、高さ約23.3mあります。その南側が井戸曲輪（いどくるわ、いわゆる腹切丸）です

姫路城の石垣は、築かれた時代別にI～V期に分類されます。16世紀末頃に羽柴秀吉が築いたのがI期で、自然石を積み上げた野面積み。関ヶ原合戦後に播磨に入封した池田輝政により慶長6（1601）年頃から築かれたのがII期で、矢と呼ばれる楔（くさび）で割った石を積んだ打ち込みハギです。天守台石垣がその典型で、全国的に城郭石垣築造の最盛期のもので、石垣技術の発達を知る上で基準となっています。



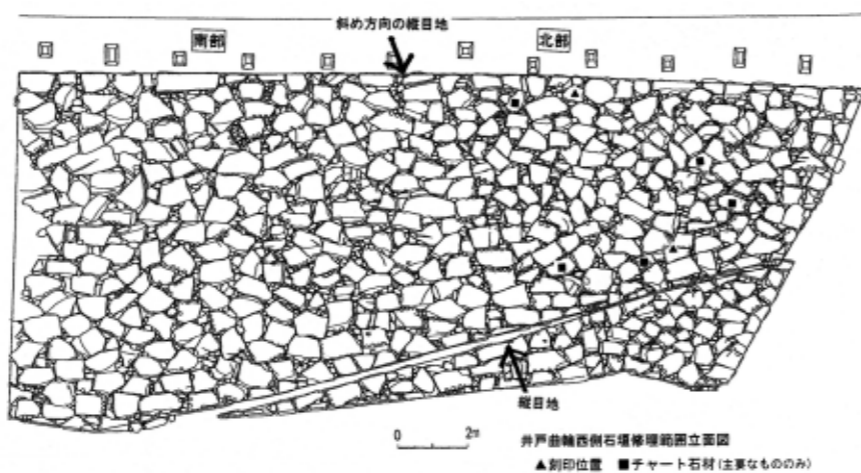
2 保存修理工事の概要

姫路市では平成2（1990）年度から、継続的に石垣修理を行ってきました（平成10～14と19年度は未実施）。今回の井戸曲輪西側石垣ではオリジナルの石垣を解体せずに、脱落していた間詰石を補充するとともに、石材に生じたひび割れに樹脂を注入することにより、割れの拡大を防ぐ工事を行いました。

- ・期間 平成27年12月24日～平成28年3月18日（予定）
- ・面積 高さ約10m 長さ約25m 立面積約222㎡
- ・割れ修理箇所 24箇所

3 石材調査でわかったこと

石垣を主に構成する石を築石といいますが、今回の修理では工事範囲内の築石



約520個すべてについて調査カードを作成し、大きさや石材の種類などを調べました。

井戸曲輪西側石垣をよく見ると、中央やや左上から右下方向へ石積みの境が斜め方向に入っています。このような積み方は縦目地（たてめじ）と呼ばれ、技術的に悪いとされます。通常は石垣を拡充した時に古い石垣の角部分がこうなります。これは姫路城でも「りノ一渡櫓下」や「三国堀北側」などで見られます（三国堀北側は再現したもの）。しかし、積み方を見ると今回の縦



目地は古い石垣の角部ではないようです。

また石材調査の結果、この線を境に南部では河原石（丸石）、北部では割石と主な間詰石（まづめいし）の構成が違ってくるわかりました。築石も南部では広峰山（ひろみねさん）から増位山（ますいやま）周辺が主要山地の黒灰色から暗い紺色の凝灰岩、北部では同じ凝灰岩でも鬘櫛山（びんぐしやま）周辺に多い淡黄褐色のものが主体となり、チャートと呼ばれる硬い石も混入していました。詳細な分析はこれからですが、石の大きさも北部のほうがやや小さいようです。

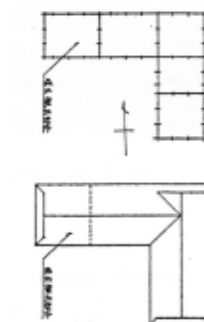


その他、石に記号を刻んだ刻印も、北部で新たに2個確認できました。ともに○の中央をやや「く」の字になった横棒が突き抜けるもので、姫路城ではいままで知られていない形です。

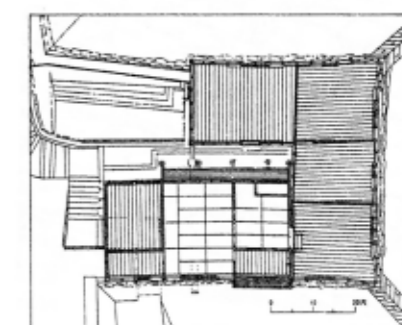
4 考えられること

このような差が生じた理由は何でしょうか。昭和27～29年に行われた帯の櫓の解体修理では、現在コ字形になっている櫓平面が池田時代には北と東だけであり、井戸曲輪に面した南側は本多時代（1617年以降）に増築されたことが判明しています（加藤得二『姫路城昭和の修理』真陽社）。井戸曲輪へ通じる穴門は、この増築部の下を通過しています。今回修理した石垣の北部は、この穴門に隣接しているので、櫓の増築にあわせて、石垣の改造と積み直しが行われたのではないのでしょうか。

従来、この周辺の石垣はすべてII期とされてきましたが、江戸時代に入っても意外と城内の改変が行われたのかもしれませんが。また、石垣編年を精緻にしていくための資料となると考えています。



帯の櫓増築前の平面と壁根の形状
 【『姫路城保存修理工事報告書Ⅱ』より】



帯の櫓 敷居屋内部（左）と現状平面図（上）
 【『姫路城 歴史群像名城シリーズ10』学研より】